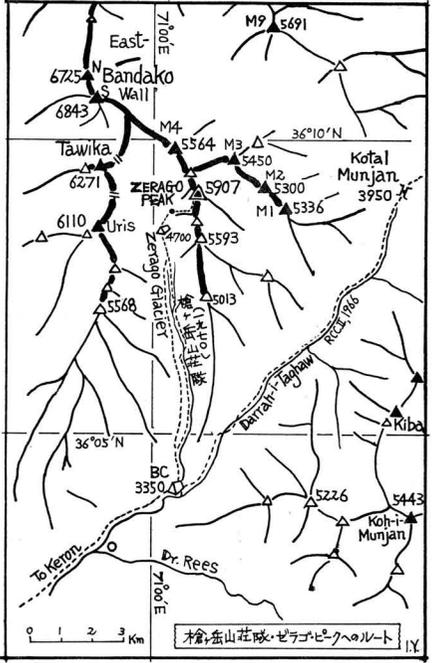
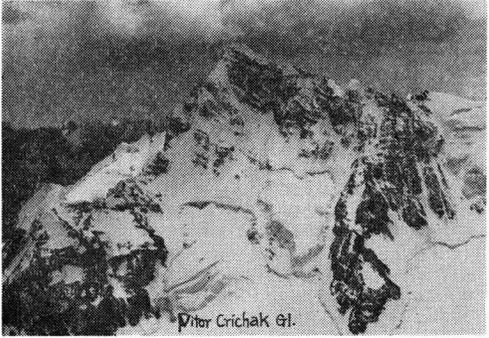
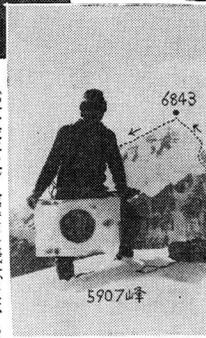


(注・この際の登山もなかなか立派なものである。特にゼラゴ峰はバンダコ1山群で残っていた最高峰であるし、パルン槍峰はフレイが途中で諦らめた峰である。よくやってきた。(吉沢)

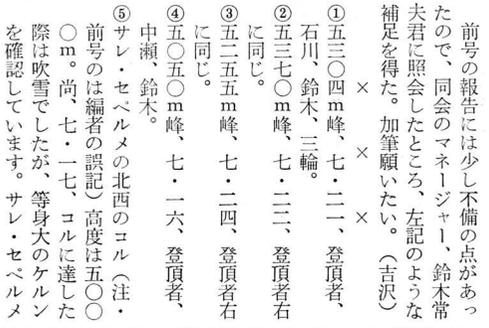
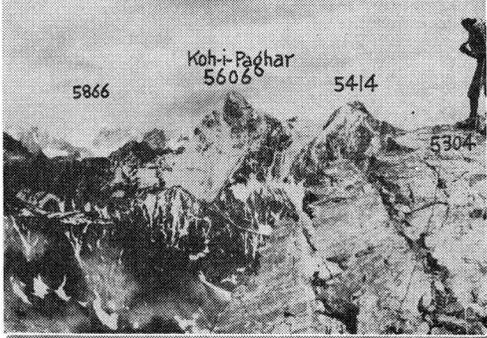


(写真左上) 槍峰は残念ながら自分達の登ったゼラゴ峰の明瞭な写真は簡らさなかつたが、同峰から見たバンダゴ1主峰のものは大変参考になった。これによると前号で紹介した長崎大隊のルートが相当なるものであることがはっきりわかる。前号四頁下の写真の中央あたりにある低いのが五九〇七m峰かと思われる。右の写真はゼラゴ峰の頂上に立つ隊員の一人で、後ろにバンダゴ1の主峰が見える。旗の先に見える雪の平地はタウィカ峰に続く山稜のコルである。安川茂雄隊の撮った写真にもゼラゴ峰は出ているが、登る値打ちは充分である。(吉沢)



蒲郡山の会の写真
前号の補足

(右) 五三〇四m峰からのコ1・イ・パガル(五六〇六m)北面、その右は五四一四m峰。
(左) 五三七〇m峰より、パガル北面。パガル東峰は陰になってみえない。



【蒲郡山の会補遺】

(右) ビリア谷ACよりワルマノ谷(Dr. Wamano)。高山はコー・イ・サフェド(Koh-i-Safed, 6001m)。

前号の報告には少し不備の点があったので、同会のマネージャー、鈴木常夫君に照会したところ、左記のような補足を得た。加筆願いたい。(吉沢)

- ① 五三〇四m峰、七・二二、登頂者、石川、鈴木、三輪。
- ② 五三七〇m峰、七・二二、登頂者右に同じ。
- ③ 五二五五m峰、七・二四、登頂者右に同じ。
- ④ 五〇五〇m峰、七・一六、登頂者、中瀬、鈴木。
- ⑤ サレ・セベルメの北西のコル(注・前号のは編者の誤記) 高度は五〇〇〇m。尚、七・一七、コルに達した際は吹雪でしたが、等身大のケルンを確認しています。サレ・セベルメ

峰は西ドイツ隊(一九六二年)のカタタラ(五四〇〇m)に当ると思われます。
⑥ 五四一四m峰とパガルとのコルは五三〇〇m。
⑦ アブドール谷のACは四五〇〇m。
⑧ パガル東峰の登頂者は中瀬、長坂です。
尚、パガル東峰の件ですが、ピリア谷から見ると中央のピークが一番高く見えますので、左手の雪壁を登って稜線に出、約一〇〇mの登攀でピークに登頂しました。
しかし登ってみるとパガルは七、八〇mのジャンダルムの後ろに聳えていて一kmぐらい離れていたそうです。パガルを攻撃するためジャンダルムのコルに下降しかけましたが、もうい岩稜とピバールの疲れで諦らめ、アブドール谷へ下降しました。
この程度のピークが東峰と言えるかどうか、遠征中も帰国後も迷っていましたが、仮報告書には取りあえずパガル東峰としておきました。

◆ウィレム・ヘッケル◆
チエコスロバキアの(ばかりではない)有名な山岳写真家、ヘッケルについては前号に一寸触れたが、今度『アルピニスム』の九月号を見て、その死が確認されたので一応紹介しておくことにする。
私のところには彼がこの運命のアンデスへ行く直前に署名して送ってくれた『Schody pod Vesni』というチェコ語でティリチ・ミールへ行った(一九六七年)時の写真集がある。この中に高橋定昌君が一頁大ののっているのが面白い。
七〇年には52才だったが40代にしか見えない位元気で『アルピニスム』でも写真は多く彼のコレクションと間に合っていたという。(吉沢)

MIR・SAMIR

5809 m

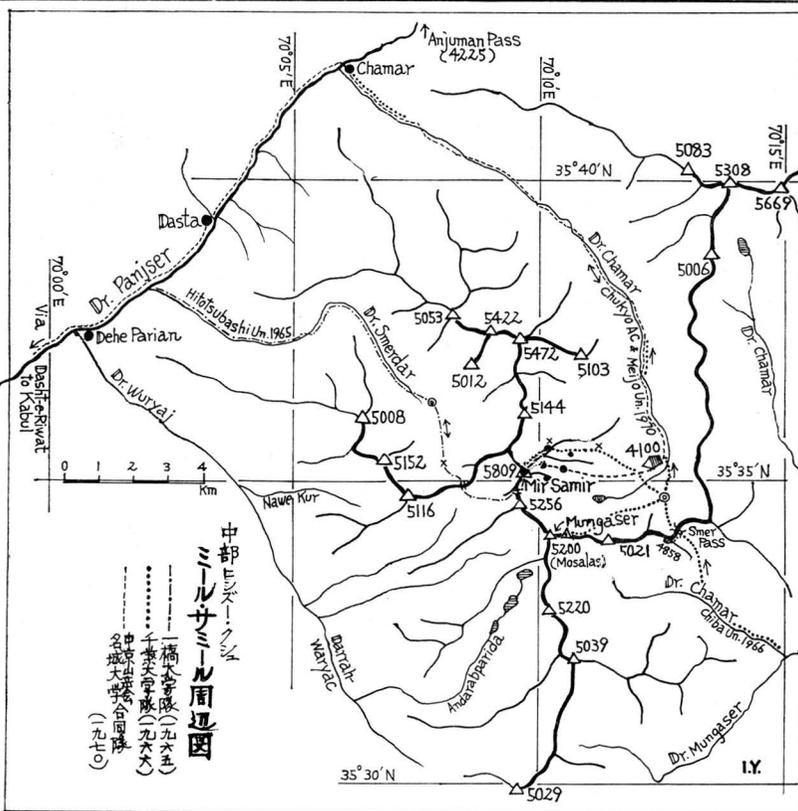
東面新ルート

A・中部HK
 六・中京山岳会
 名城大学
 合同隊

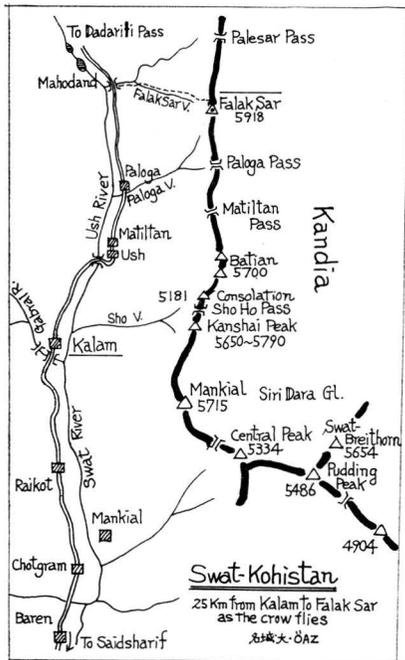
この合同登山隊は最初のミール・サミールだけで、あとの方ラク・サールとコラホイ(イ

名城大側、大山幸太郎(隊長、28)、有田豊(副隊長、28)、沢田宗親(22)、植野恭正(21)、平林寛也(19)、河野慶三(医療、24)、ミール・サミールだけに参加)。
 中京側、半田重雄(隊長)、橋本美、

武藤、石塚、御者。
 ミール・サミールの場合には半田が隊長で、大山は副隊長となる。
 二、往路、羽田、ニュー・デリー、カール谷、カワク谷出合、ダスタ、ダシレマール谷、BC(四一〇〇m、7.12)三、登山活動、四八〇〇m峰(7.13、橋本、植野)、HC(四八〇〇m)、AC(五二〇〇m)、正面リッジ登攀登頂(7.21、武藤、沢田)、BC撤収(7.23)、カール谷(7.26)。ここで両隊は分離する。



中部ヒマラヤ
 ミール・サミール周辺図
 一橋大学隊(九六五)
 中京山岳会(九六六)
 名城大学合同隊(九六六)
 名城大学(一九七二)



B・スワット
 一、名城大学隊
 一、隊員、前出、但し河野帰国。
 二、スワットへの経路カイバル峠、ベシワール、マラカンド、サイドシャリフ、カラードム、マチルトン、ファラクサール谷(8.7)、BC(三九〇〇m、8.8)。
 三、登山活動、AC

Alpinismus, 7/70
 一九七〇年の二月下旬、トルコ山岳会に属する Bozkurt Ergör, Sönmez Tarzan, Ahmet Sahin, Teoman Ege の四人がアララットの冬期登攀を目指した。
 最初の試みは二月の一八日に行なわれたが、三五〇〇mの高度でひどい吹雪に遭って退却。
 その二日後、二回目を試み、夜のうちに登攀を開始し、二二日の昼頃、四八〇〇mの地点に達した。
 ところが、B・エルゲールを除く他の

(四九〇〇m、8.10)、登頂(沢田、植野、8.19、13.50)、BC撤収(8.22)、ラウルペンディ(8.24)。
 コラホイの方もここで序でに紹介しておこうと思ったが、著しい登山活動は行っていないので省略する。
 四、帰路、スリナガール(9.11)、ニュー・デリー、バンコク、香港、大阪。(参考資料、名城大学第一次ヒマラヤ調査隊帰国報告書)

アララット峰(トルコ)
 の冬期初登頂
 三人の隊員が高山病でたおれてしまったので、エルゲール一人が残りの四〇〇mを頑張り、遂に二月二一日午後一時にその頂上(五一六八m)に立つことが出来た。
 全員同日中に出発点に無事戻る。
 二、三年前にヨーロッパのいろいろな山の雑誌に、オーストリアの Heintz Linzbichler 隊がこれの冬期初登頂をしたように報道されていたが、これは誤りであるという。
 冬の登攀季節というのは、特に温暖な地域においては、三月二日をもって終るとするのが一般の定説である。こういう地方では四月の中旬になるともう二〇〇〇mの高度まで雪がなくなってしまうのである。(吉沢)

続「切手と山男達」
 四谷竜胤君の「山と雪」に首題の駄文を書いたところが、會員の村尾金二君に褒められた。私の文が褒められたのはこれがはじめてだ。
 その「続」とつけたのだが、昨年HJに原稿を送ったところが、礼状が来ないうちに泣きごとのような督促状が来た。
 私が、礼状もくれないようなところへはもう原稿は送らないうと返事すると、実はという答えが来た。
 あちらでは奇麗な切手が貼ってあると、ひどい時には封筒も中味もなくなることもあるから、今度からはメールリング・マシーンで消印?して送ってくれということであった。
 好意ばかりでなく、現物までなくなってしまうのではやりきれない。要注意。(吉沢)

日山協海外登山推薦 状発行規則一部改訂

日山協海外登山推薦状発行規則が次のように一部改訂された。

第一条 社団法人日本山岳協会(以下「協会」という)は海外に出かける登山隊(Expedition)に対し、本規則の定めるところにより推薦状(Recommendation)を発行することができる。

第二条 前条による推薦を受けようとするものは、協会定款第五条に規定する加盟団体(都道府県山岳連盟または協会)を経由して、加盟団团长より協会々長あての推薦状を付し下記の書類を提出するものとする。

- (1)推薦状交付申請書 二部
- (2)計画書 二十部
- (3)誓約書(別紙様式一による) 一部

【隊員の氏名、年令、経歴、登山計画、経費予算ならびに入国の見通し、外貨枠取得に関する具体的方法、関連する後援団体の名称、その他参考となるべき事項等を記載のこと。なお英文によるApplicationを三部添付して下さい。】

【隊員の氏名、年令、経歴、登山計画、経費予算ならびに入国の見通し、外貨枠取得に関する具体的方法、関連する後援団体の名称、その他参考となるべき事項等を記載のこと。なお英文によるApplicationを三部添付して下さい。】

第三条 協会は、常務理事会において申請書に基づきその内容を審議し、推薦を受けようとする隊が、海外における登山を行なうに当り一応の技術的水準に達しており、かつ安全に目的を遂行し得る能力を持っていることが認められた場合に限り、推薦状を発行する。ただし、常務理事会は、常務理事会に

おいて審議が困難な場合には海外登山審議委員会にその審議を付託することができる。

第四条 協会は、推薦状を発行した隊に対しても、経済的負担ならびに事故に対する責任を負わぬものとする。

第五条 協会は、推薦状の発行に当り、必要に応じて当該団体の責任者より推薦内容を確認するための念書要求することができる。

第六条 推薦状の英文は(Recommendation)とし、外国に対しては、(Authorized)(Sponsored)等のまぎらわしい名称を使用してはならない。

第七条 推薦を受けた隊は、許可を得て「協会後援」の名称を使用することができる。

第八条 推薦を受けた隊は次の事項について、協会に対し文書をもって報告しなければならない。

- (1)計画変更
- (2)出発通知
- (3)現地報告
- (4)帰国ならびに遠征終了の報告
- (5)報告書等の出版に際しては、協会の資料として提出する。

第九条 本規則は協会理事会において改廃することができる。

付 則

一、本規則は昭和四十四年三月十四日から実施する。

二、本規則による推薦状は、国際スポーツ行外用外貨枠とは関係のないものとする。

昭和 年 月 日
社団法人日本山岳協会
会長 殿
団体名
代表者
誓約書
印

………会(部または連盟)は今般、昭和〇〇年度……へ派遣する遠征隊に関する一切の責任を負い貴協会に対して御迷惑をおかけしないことを誓います。

三、推薦状を発行する場合は次に定める手数料を徴集する。

イ、和文推薦状一通につき 一五〇〇円

ロ、欧文推薦状一通につき 二〇〇〇円

ハ、台湾推薦状一件につき 三〇〇〇円

四、昭和四十五年十月七日改訂(様式一)

昭和 年 月 日
社団法人日本山岳協会
会長 殿
団体名
代表者
海外登山に対する推薦状交付申請書
今般、………会(部または連盟、協会)は昭和〇〇年〇月……へ別紙計画書の通り遠征隊(登山隊)を派遣するので、貴協会の推薦状を交付願いたく申請致します。

隊の正式名称(和文、欧文) 目標とする山 実施の時期 隊長の氏名及び隊員数 留守本部 推薦状の宛先(欧文の場合は正式名称記入のこと) 推薦を必要とする理由 その他

日本山嶽志復刻版頒布 原典と全く同じものです。本会ルームで四千五百円(送料二百円)で発売中。

会員通信

小佐渡の飯出山 藤島 玄

佐渡に飯出山がある。飯豊連峰に深い関心を持つ者として、早くから訪れたい山であった。

小佐渡の西は、前浜海岸に沿って北東から南西に走る前地状をなして、最高峰の大地山が六四六mにすぎず、顕著な山として大隅山・因見山・東境山・経塚山があり、みな六〇〇mを越すが平頂である。

一等三角点の山の歴訪で、初めて小佐渡の経塚山に猿八の村落から登り、真野湾と両津湾の上に大佐渡山脈が雲表に聳えて堂々と連なるのを見た。

志和会員が一切の段取りをしてくれていたので、佐藤一栄君と九月に再度小佐渡の山を訪れた。佐藤君は三月の積雪期に河崎から朱鷺で有名な古峰峰・大隅山・米山・因見山・大地山と北平の山々を単独で歩いている。

両津へ渡ると、高橋照男佐藤山岳会副会長の車で、畑野町、長谷寺、小倉峠と一気に馳せ向う。ここで志和君一行と合流して東境山に登る。下道は確りしているが、灌木が生え茂り、鈍で刈り払う大サービ登山となった。ここで思ったことは、大佐渡山脈の植生と全然別れの灌木で、むしろ新潟の五頭山塊の植生に似ている。シャクナゲ・レンゲツツジの大群生も、広々とした芝生原もみられなかった。

頂上には倒壊した御堂の柱が腐ってあっただけで、東教寺山といわれた信仰の佛もない。

小倉峠から女神山のテレビ塔まで車道があり、一方峠道は南へ下って男神山の中腹を巻き多田港へ行っている。

われわれは峠道を下り、女神山と男神山の鞍部へ一直線に上る送電線の下を登る。男神山は女神山に較べて、ひどく小さく低い。佐渡では余程昔から女性上位であるらしい。地藏堂から弥彦山・阿田山、後には守門山と栗谷岳が高い鞍部から女神山へは赤褐色の岩稜の登りで、発電機の音するパラボランテナの女神山の平頂へ出た。広々とした一隅の展望台に上がり、車で運んでおいた昼飯にようやくかぶりついた。

そこから見ても、経塚山の三角峰はあそこだと指摘できない平頂である。すぐその後の真野湾が輝きたした。

小倉峠へ下る車道から離れて、北へ下る山道へ入る。一つの峰を搦むと、いきなり南面風の岩峰の頂上に飯出山の御堂が現われて、一行も思わず足を止めて、カメラを向けた。

「飯出山大権現守護」の守札が五六枚小石の重しの下にあり、賽銭も散在している。正尊は十一面観音像で、堂の内外に石地藏が果々と供えられている。

西対岸に聳えてやや高い元飯出山を見上げ、影の濃くなった深い荒谷を見下ろしたりした。ここからの下山道は藪が被り、松がびっしり植えてある。信仰はどうやら前浜の多田港方面からだけが幸じて生きているらしい。

小倉川の車へ戻り、五名だけが八瀬松からモリモリ林道を登る。約五〇〇mの峠から、元飯出山目懸けて灌木藪をこぎ分ける。松林へ入ると足元も楽になり、四等三角点の頂上へ出た。六時である。赤い夕陽がみるみる海へ沈む。六時の汽船に乗り、五つ目の山頂が六時。これはあるが、その夜は波の音を枕にする新町の若林旅館に泊った。

翌日は、両津市赤玉の黒天然記念物指定の「杉池の広葉樹林」を観て帰航し、長岡市の風谷山頂の見えに馳せ参した。

南半球から

松方 三郎

N兄—メルボルンでロー君に会ったら、君は元気かときいていた。原子力船むつこの模型を作っている話なんかしたかったが、話がややこしくなりそうなので、ひとこと、大いに元気だといっておいた。とにかくロー君の近況を報告する。

ロー君数年前に南極研究所の所長の役を退いたことは知っていると思うが、今度聞いたら、現在は工業専門学校のようなのを十幾つか集めて、それを総括する仕事をやっているということだった。東京で会ったときには、半日時間があるというので、何処でも案内しようといったら、西洋美術館が見たいといったので一緒に上野に行ったが、南極ばかり行っている男がロダンを見たといつたのはちょっと驚いた。今度もちょっとの時間を割いて、新しい美術館を見せてくれた。

うちに行ってみると暖炉の前にケルグレン島から持って来たみことな三稜石が置いてあった。ぼくも一つ持っているといったら驚いていたが、彼はその石が三方からの砂のブリザードで削られていく話をしてくれた。ケルグレン島はティルマンが例のミスターフ号で行っている。彼にはその航海と登山についての著述のあること御承知の通りだ。日本の山登りもそろそろ、ああした形のものが出て来てもよさそうだと考えながら、夫妻と楽しく一晩を過ごした。

モーソンの話が出たら、デイヴィスの本を読んだかというから、知らないといったら、早速一冊手元のものをくれた。(K. Davis, High Latitude) デイヴィスというのはシャクルトンやモーソンの遠征で女房役として活躍

した船長だが、いわば船乗りとして南極に終始した人物、当然のことだが、登場人物はその方面の巨人達、近頃読んでみてこんな面白い本はなかったというのがぼくの読後感だった。

なかなか面白いエピソードも出て来た。シャクルトンとデイヴィスとが大喧嘩したとか、アムゼンとスコットとのいわゆる極点競争に關連して、デイヴィスがアムゼンの方に肩を持ったように報道されて、とんだ誤解をうけた話など。総じて新聞の評価は高くない。スコット、アムゼンの場合は、当の二つの遠征隊よりは新聞の方が不必要に对立をあげる書振りをしたような節々、当時のナショナルリズムの時代の反映とはいえ、当時のマスコミも大いに一役買ったという風に見える。デイヴィスは、いつも裏方の存在だったが、こういふ話もなかなか面白いが、彼の本を読んでぼくも南極探検の困難さが、そしてその時代の人々の偉らさが一層わかったような気がした。

今日船は比べものにならないほどよくなっているし、南極に対する知識も敏速にいたっているには相違ないが、探検や遠征に關心のある人なら、この本のもつ迫力がよくわかるに相違ないと思う。

モーソンの「ホーム・オヴ・ブリザード」の普及版を手に入れたことも今度の濠州行きにの収穫の一つだったが、何としてもロー君に会えたことは、予期していなかっただけに嬉しかった。

Y兄—オークランドではヒラリーの奥さんや子供達に会った。兄に連れられもよろしくのことだったが、日本の旅はひどく気に入ったようで、ギル君の話だと、彼等は帰ってから日本のことばかりしゃべっている、という

ことだった。ぼくは早速、キックマンの調味指南パンフレットの翻訳をやらされた。

サー・エドモンドはちょうどアメリカに行ったあとで残念なことをしたが、近所に住んでいるN.Z.山岳会の若い連中何人にも会うことが出来た。とくに佐藤さんや兄、ならびに富山や富士山で世話をした諸兄弟の好意は十二分にアブリシエートされ、それがヒラリー一家の日本評価の上で大変大きく作用していることを知って、何よりも嬉しかった。

オークランドでは一晩泊つただけだったが辛うじて彼等やギル夫妻と旧交をあためるのに終つたわけだが、それでも行ってよかった。何しろオークランドに行ったのは数えてみると十五年も前、例の極点旅行の直前のことだから。

子供達のネパール旅行を書いた紀行 Louise Hillary, A Yak for Christmas にはみんなにサインをしてもらったが、旅の間に読んでみて、世にも楽しい本だと思った。

つまるところはヒラリー一家の旅行記には相違ないが、あれくらいシエルバ達の日常生活や性格をよく書いた本はないのではないだろうか。シエルバ族についてはフェューラー・ハイメンドルフの立派な研究などがあるにはあるが、生きたシエルバを語っている点では、このレイディバ・ヒラリーの紀行にはとても及ばないように思う。

何はともあれ猛烈に面白い本だ。日本も何処もあの地方には入っていないが、まだこゝ当分は、あそこまで行けないのではあるまいか、というのがぼくの感想である。それに野郎ばかりが何人束になって行っても、入れないところには入れない。女性でなければならぬ場合もあり、子供だからこそ開かれる世界もある。

今年日本は仲間も随分たくさんヒラリー夫妻に接する機会があったわけだが、あの本は是非皆さんに一読を進めたいものだと思った。

梓会だより

茶谷 東海

田部重治名誉会員の指導によって大正三年海軍経理学校に創設された山岳部梓会は終戦によって自発的に解散したが、去る三十七年夏復活した。戦前会員は四百名を越えたが復活後は懇親会や山行に自由に参加した人すべて会員としその数二百。今年は日本山岳会より諸岡一丈氏を加えた。ご参考まで本年の主要行事を報告する。

一、第九回年次懇親会兼総会

十一月八日(日)正午秩父市羊山公園の武甲荘(国民宿舎)でよく晴れた武甲山を眼の前に開催した。参加者は日本山岳会三名、元海軍九名、防大一名、元陸軍三名、女性三名の計十九名。田部会長病氣のため元海軍経理学校長紺野逸弥氏会長を代理して挨拶の後、武甲山を背に記念撮影、茶谷代表幹事が六十周年記念事業として雲取登山、記録発行、記念懇親会を提案、これを承認した。次いで夕食に移り、諸岡一丈氏の音頭で乾盃し、本会の名物たる自己紹介が二時間続く。終わって日本エベレスト登山隊員(気象担当)長田正行一等空尉がスライドを中心として間カトモツ山岳隊員エベレスト登頂までを解説する。最後に田部会長の希望により折角の霧凇行きを秩父御岳山登りに変更して馳せ参じられた柿原謙一氏が秩父の原生林を乱伐より守る努力をされていること、田部先生と奥秩父との関係などを静かに話され、紅葉に映える窓外に夕もやが迫る五時閉会した。

二、武甲登山

十一月九日(月)昨夜武甲荘に泊つ

た諸岡、茶谷ら八名が午前八時車で出発、生川の手前で下車、表参道を登る。静かな杉木立を二時間半歩き西参道合流点を経て小湫木山の山頂一三三六mに着く。小さな御岳神社の奥の宮にお参銭を供えて夕食をとりつつ三六〇度の展望を楽しみ、帰りは頂上からの裏参道を見送り、合流点は頂上からの尾根道を通る。岩道を一時間下ると浦山道分岐点に出る。あとは秩父市内を見下しながらジグザグに下る楽な道、石灰岩の採取で十年後には武甲も変貌するであろう案じ。途中裏参道合流点で「爆破作業のため裏参道通行止」の表示を見て裏参道を下りなくなってきたと思う。上の丸山、下の丸山を通って横瀬村へ下り、丘を越えるともう羊山公園だ。四時過ぎ武甲荘に着き乾盃の後、名物黒駒酒を買い、西武秩父駅に向う。全員快調。

三、夜叉神峠バスハイク

九月二十三日(水)朝八時曇り空の品川駅前を山梨交通バスで出発、参加者は岡村治信、浜田一馬夫妻、山口一孝、茶谷東海夫妻ら男子二十七名女子二名計四〇名。交通滞滞で夜叉神荘に着いたのが三時、雨のため峠登りを断念し行幸記念碑前の白鳳溪谷をのぞき駆走で峠を上した三名を收容して五時発、甲府駅前で食糧を仕入れ、勝沼でみやげの葡萄を求めて車中懇親会としゃべりつつ十時品川駅前着。

四、金時伝説めぐり

四月十二日(日)と十九日(日)二班に分れて金時(坂田金時)の伝説地を廻った。両日共霧深く展望なし。参加者男子三十六名女子一六名。コース次の通り。小田原⇒金子温泉⇒金時神社、金時公園(長尾沢、宿石)⇒姥ヶ茶屋(乙女峠)⇒金時屋、金時娘一足柄峠⇒地蔵堂⇒関本。結構楽しかったとは負け惜しみの弁か。

昭和四十五年度年次晩餐会

昭和四十五年度年次晩餐会は十二月十二日午後六時から平河町マツヤ・サロンで開かれた。六階の大ホールには例年通りバーが特設され、「この一本展」でそれぞれ曰く因縁ある図書が展示された。即売コーナーでは、「エベレスト写真集」、「日本山嶽志複製版」、「十五万分の一ガウル地図」、「山に忘れたパイプ」など若深堂関係の山岳図書などが並べられ、クラブ・タイ、会章入りネクタイピンなどの売れ行きも上々。

定刻六時中屋常務理事の司会で開会別項の三田会長あいさつがあり、神谷名譽会員に永年会員章が手渡された。中原繁之助永年会員の音頭で乾杯後食事に移り、神谷氏のあいさつ、山崎常務理事の行事報告(別項)、松方三郎氏の「エベレスト報告」、高頭寿久氏のあいさつについで物故会員への黙祷後次の方々からそれぞれひとくちスビ

イチがあった。

冠さんの追悼(藤島敏男) 藤木さんの追悼(今西寿雄) ヒラリー卿の来日(佐藤テル) アイガーの話(佐藤久一郎) アンナプルナ三峰(宮崎栄子) P29(安野祥太郎) エベレスト・スキー(水野祥太郎) 自然保護(村井米子) 河内山荘の改築(高山忠四朗) K2の模型(マライニ) 感想(佐藤達彦) 南極越冬談(中野征紀) スペインの山(山口建児) 復活会員の弁(井田研二郎) 感想(山下久男)

出席者は二三名という盛会で、散会后出来たての山日記七一年版を出席者全員に配布した。(山崎)
 ▽出席者 青木昇、赤瀬暁、綱倉志朗、安彦六郎、安間荘、青木一夫、穴田雪江、市川英倫、岩崎三郎、今井房子、今井雄二、伊吹一郎、稲田房彦、美子、今井雄二、伊吹一郎、稲田房彦、岩水信雄、飯野亭、板倉勝正、今井田研二郎、今西寿雄、伊倉剛三、飯田輝

三田会長あいさつ要旨

こししもまた年次晩餐会で会員の皆さんにお目にかかれたいへんうれしい。会はことして六十五周年を迎え、年次晩餐会も年々盛んになってきています。会としてはことごと存知知のように懸案であったエベレスト登山を計画し東南稜からの登頂に成功した。多く

をお願ひしたい。また本年度は評議員会で名誉会員の推薦はなく、五十年在籍の永年会員として神谷恭、佐藤隆太郎両氏がなられた。ここに銀巻きの会バッチを贈ることとした。
 いま一つ、会報でもご承知のように高頭仁兵衛氏の大著「日本山嶽志」をさきに複製したが、複製版百部を高頭家から会へ寄贈していただき、またこの版権も会へ譲渡された。その他お礼の意味でお孫さんの高頭寿久氏を本席にお招きしたので御紹介する。

英 伊藤博夫、石原憲治、今井嘉道、岩間利美、岩崎京二、遠原知栄子、宇田川久太郎、浦野勇逸、漆藤光男、大沢伊三郎、岡田幸雄、大森薫雄、織内信彦、小倉童子、小倉茂輝、大森弘一郎、小野敏之、折井健一、大塚博美、岡村治信、荻野和夫、岡部みち子、岡部令息、萩野恭一、大野俊夫、小栗孝康、小方全弘、勝田房治、川森左智子、交野武一、川北一郎、川上忠義、川崎巖加藤泰安、金坂一郎、スケルトン、雁部貞夫、加治甚吾、風見武秀、川崎吉蔵、神原達、神谷恭、加納一郎、神原忠夫、鎌内章、神崎忠男、蒲生明彦、菊地文雄、木村勝久、工業英司、栗原敏起、黒石恒、見学文、河野幾雄、近藤信行、後藤幹次、小林猛臣、小林智明、小山勝司、見島勤次、坂倉登喜子、佐藤久一郎、佐藤テル、佐々保雄、桜井信雄、沢村幸蔵、齋藤桂、佐藤達彦、佐藤健治、桜井善志、西郷正郎、齋藤健治、藤兼治、設楽芳夫、鳴原啓佑、柴田均二、進藤波男、白川義員、島田巽、城山正三、柴田藤太郎、山崎茂利江、篠田勝久、須田紀子、鈴木昭、鈴野藤夫、鈴木恭一郎、杉山孝住、住吉仙也、本多昭一、五月女進一、関田美智子、関根吉郎、瀬名貞利、武田満子、高橋定昌、宅間清子、高山忠四朗、田部井淳子、竹田寛次、田口二郎、丹部節雄、谷口現吉、田畑真一、高木高男、田村扇一、伊達篤郎、田中正智、田口三郎助、田村将、茶谷東海、鶴岡元之助、塚本茂樹、寺井清吉、外山義夫、鳥居亮、外山定男、中田勇吉、長尾悌夫、中屋健一、中野征紀、中河与一、中保、中原繁之助、中村太郎、仲村恒明、中島寛、沼倉寛二郎、野上成男、野口秋人、早川義郎、原口幹市、羽田栄治、浜島、林清、原謙一、広谷光一郎、平沢龜一、平山武志、日高信六郎、平野彰、日下田英、福井正吉、藤井連平、二本信次、古沢肇、船越好文

本会の現況報告

四月以降の会の現況を簡単に御報告する。
 昭和四十五年十一月末現在で在籍会員数は三〇六四名(三月末会員数二九八九名)うち四四、四五年度の会費納入者は二四二五名である。退会者一名除籍者六〇名、新入会員一五三名となっている。
 十一月末までの物故者は名誉会員冠松次郎氏をはじめ若いところでエベレストの成田隊員、最近になって東靖一上田哲農氏らが亡くなられ一七名の方が亡くなった。十二月にはいり、早々本会前書記永原輝雄氏、名誉会員藤木山岳六五年は目下編集集中である。会報山は三〇〇号を突破し、二五二一号から三〇〇号の合本を作り、希望者に頒布している。山日記は七一年度版が出来十二月末七〇年度会費納入者に無料で配布することにした。また山岳二六年から六〇年までの総索引も原稿がまとまり、印刷にまわす段階にある。集会は恒例のウエストン祭、木暮氏

新永年会員紹介

神谷恭氏 明治二十三年四月二十五日、道一朗次男として長野県大町に生れる。大正八年十二月日本山岳会に入会。会員番号七四四。紹介者は中村清太郎、加賀正太郎両氏。昭和七年から九年まで、理事として山日記、会報、会計などを担当。昭和二十五年から三十二年まで評議員。昭和三十五年

碑前祭、もみじ会を行ない、月例小集会は二六五回に達した。またこの五月は越後支部の肝入りで佐渡で現地支部長会議を開き盛会であった。図書委員会では十月に第三回図書交換会、この一本展を開いた。また技術指導委員会では十一月に富士山で冬山技術講習会を開催した。
 海外関係ではニュージーランドのヒラリー卿をはじめ、エベレスト隊のシエルバ、チョタレ、ビンジャー、カトマンズのビナヤ記者、ヒマラヤ・ソサエティのパラジャー事務局長、フランス国立登山学校のコンタミヌ氏など多数の登山関係者が来日、会として歓迎会を開いた。
 海外登山も盛んで、ネパール・ヒマラヤだけで十三隊が活動した。すなわち春は本会のエベレスト、東海支部のマカルー、女子登攀クラブのアンナプルナIII、早大のツクチエ、慶大のパウダ、関西高会合のダウラギリVI、関大のアンナプルナIVの七隊、秋は同志社のダウラギリ主峰、阪大のピーク29、日大のダウラギリ無名峰、静岡大のチーレン・ヒマール、大阪市大のカンジロバ・ヒマール、福岡隊のダウラギリIVの六隊が出て福岡隊のほかいずれも成功したが、そのいずれにも本会が中心となって活躍した。またヒンズークシエ、アンデスなどへも多くの日本隊が出かけている。(山崎)

から三十九年まで評議員。

明治四十年(一)から兄尚志の学友中村清太郎の感化で山に関心を持つようになり、明治四十二年、当時築地にあった工手学校(現在の工学院大学)電気工学科を卒業、その記念に学友二人とはじめて吉田口から富士登山。以後北ア燕、槍縦走、木曾駒、八ヶ岳、奥多摩、秩父、大菩薩などの山々に親しむ、大正十五年霧の指を受けし武田久吉、木暮理太郎氏の指導を受ける。昭和二十四年お茶の水ルーム完成後藤島敏男、成瀬岩雄氏らと土曜会を開設し現在に及んでいる。昭和四十年十月名譽会員に推された。(会報二四六号参照)。

佐藤隆太郎氏 明治二十四年八月十七日秋田県横井市黒川村川原に生れる。北大農学部卒業後農事試験場などに勤務。大正九年十月日本山岳会入会。会員番号七五一。

山歴は明治、大正年間若木山、岩手山、早池峯、飯盛山、蔵王山、朝日連峰、月山、鳥海山など東北の山々をはじめ、大正末期北アルプス、中央アルプス、南アルプス、白山、北海道日高山脈、芦別岳、大雪山、四国石鎚山、九州九重山、開閉岳、祖母山、英彦山、樺太突祖山など全国の山々を登る。

第九回「この一本展」

昭和四十五年年度の第九回この一本展は図書委員の努力で十一点が集まり、年次晩餐会の会場に展示された。晩餐会の前日、藤木九三氏が逝去されたため取り急いで藤木氏の著書、レリーフなど八点を展示し故人をしのいだ。出品された各位に厚くお礼申し上げます。(カッコ内は出品者名)

出品目録

- 小泉斐『富士写真』(小林義正)
- 「北大部報」四号(林清)

津田正生「眼前教近道」(小野幸) H.B. De Saussure, par D.W. Freshfield, édition A. Tar-Geneve, 1924. (藤島敏男)

ガルワル十五万地図(吉沢一郎) 加賀爪鳳南「鳳凰山」(田畑真一) 小島鳥水「東海道五十三次の解説」(山崎安治) 志賀重昂「世界山水図説」(神原忠夫)

「山岳」十六年二号(美坂哲男) 三好・牧野「日本高山植物図譜」(佐藤達夫) Eckenstein, The Karakoram—and Kashmir (島田巽) W.H. Audin, The Ascent of F6 (島田巽)

S. Turner, An Account of an Embassy to the Court of the Teshoo Lama, in Tibet. F. Scho berkeley, Tibet and India beyond the Ganges, London, 1823. (深田久弥) (後藤修)

山岳総目録(後藤修) 屋上登攀者 雪岩アルプス ヒマラヤ登高史 藤木九三古希記念選集 藤木九三レリーフ(以上山崎安治)

山の呼ぶ声 雪線散歩 雲表縦走(以上日本山岳会) なお会場で出席者に配布した出品目録解題は次号に掲載します。

アフガニスタン国内の登山規則

一、遠征隊は、アフガニスタン国内の目標の山と登山目的およびカープルの所属大使館または海外のアフガニス

タン大使館によって遠征の内容がスポーツ的、科学的であることを証明された申請書をアフガニスタン外務省に送付しなければならぬ。

二、遠征隊は、自国を代表する山岳協会のメンバーでなければならぬ。(注・日本の場合は日本山岳協会)

三、遠征隊は、アフガニスタン当局の許可を得るため、登山のための旅行経路、登山地域を記載した書類三通を外務省に送付しなければならぬ。

四、遠征隊は確実な入国予定日と入国経路をアフガニスタン国内各地を訪問する計画のほほ確実な日程とともに明確にしなければならぬ。

五、登山遠征隊は一隊五人以上でなければならぬ。登山器具を装備した医師を同行せねばならぬ。

六、遠征隊は隊員の氏名、装備および所持品のリストを用意しなければならぬ。

七、遠征隊は、携行した貴重品や、車、カメラ、撮影機等の商品を売ってはならない。それらは携行し、アフガニスタン出国の際はすべて国外に持ち出さなければならぬ。

八、携行した食料品は、税関法によって処理される。

九、アフガニスタン国内で登山をした成果をパンフレットや本に書こうとする場合、アフガニスタン科学研究機関で使用するため、遠征隊はそのパンフレットや本のコピー五部をアフガニスタン文部省に送付することを誓約しなければならぬ。

十、国際協約に基づき、外国人が兵站基地、軍隊、憲兵隊およびその訓練所に近づくことや、それらの建物や地域を撮影することは、絶対に禁止する

十一、ハイウェイ以外で、国境線に十キロメートル以内で近づいてはならない。

十二、アフガニスタン外務省は、ワカン(Wakhan)地方で、カシミヤ(Qazi-Deh)より東へ進まないことを条件として、ヒンズークシヤ(Hindu-Kush)とパクタキヤン(Badakhshan)付近の山々に対する遠征隊の登山計画を許可する。

図書便り 昭45.11

- 図書受入報告
- (1) 日本山岳会『山一三五〇—三〇〇号』
- 昭和41—45 毎日新聞社寄贈
- (1) 『エベレスト—写真集—』昭和45定期刊行物受入報告
- (2) 兵庫山岳連盟『兵庫山岳』No. 42 (45-11)
- (1) 京都市山岳研究会『海外登山研究』No. 4.5 (45-9, 11)
- (3) 国立公園協会『国立公園』No. 251 (45-10)
- (4) 京都山岳会『京都山岳』No. 546 (45-11)
- (5) 『長野県山岳総合センター所報』1970-2 (45-10)
- (6) 『新潟県山岳協会会報』No. 5 (45-11)
- (7) 東京野歩路会『山嶺』No. 487 (45-11)
- (8) 日本山岳協会『登山月報』No. 20 (45-11)
- (6) 日本登山協会『山と雪』No. 151 (45-11)
- 【雑誌】
- (1) 『アルプ』No. 153 (45-11)

(2) 『アルピニスト』No. 9 (45-11)

(3) 『地図』No. 31 (45-9)

(4) 『HIKER』No. 182 (45-12)

(5) 『山と溪谷』No. 387 (45-12)

Books Arrived in November 1970

1. "Alpinismus", 1970-10.

2. "The Canadian Alpine Journal", Vol. 53, 1970.

3. "Deutscher Alpenverein. Mitteilungen", Jahrgang 22, Heft 5, Sept./Okt. 1970.

4. "Mountain", No. 11, September 1970.

会務報告

十二月理事評議員会

(2日午後6時本会ルーム)

▽出席者 三田会長、吉沢、深田副会長、藤井、丹部、山崎、大森、中島、神原、川上、小倉、芳野、牧野内各理事、松田、大塚エベレスト委員、加藤折井、田口、金坂各評議員、小原、今件監事

▽議事

・エベレスト国際隊の件 (藤井)

小西、植村の二人は十一月二十七日羽田を出発、十二月六日以降月末までシャモニ針峰付近でトレーニングを行なう。デイルンフアース隊長と連絡をとって行動することになっており、国際隊の予算は約二十五万ドルとなっている。

・名誉会員推薦の件 (三田)

十一月十八日評議員会で審議したが本年度は見送ることにした。

・エベレスト登山隊装備の件 (松田)

エベレスト隊の装備が十一月横浜に到着、その処分について会に保存・展示用として一セット、秩父宮スポーツ博物館、大町山岳博物館、松本民俗館文部省登山研修所へそれぞれワンセット寄贈、その他は文部省登山研修所で管理してもらう。医療関係品はJAC医療委員会が保管する。気象関係の器具はクムジュンに置いてあるものもあり、これは廃棄処分となる。以上を正式文書にして文部省に報告する、この件了承。

・エベレスト記録映画の件 (大塚)

NHKで作った記録映画を隊の公式記録映画として二本(八十分もの)会へもちょうことになった。また毎日のエベレスト写真集を四十部寄贈してもら

うことになり、関係各方面へ配布することにした。またエベレスト頂上の石も到着したので会へ寄贈する。なおアルパイン・ジャーナル、ヒマラヤン・ジャーナル、アメリカン・アルパイン・ジャーナルへの報告書の原稿は松方、大塚、平林で分担執筆している。またヒマラヤン・ソサエティの事務局長、バラジュリ氏が来日しているので歓迎会を開きたい。

▽報告

・日山協関係 (芳野)

十一月二十九日臨時理事会があり、全日本学生山岳連盟の加盟について再度審議された。前向きな姿勢で検討されている。一九七一年度のネパール・ヒマラヤの隊は日本から十九隊申請がありこのうち十一隊が正式許可された。海外登山技術研究会は一月二十三、四両日八王子で開催する。

・神河内山荘の件 (折井)

現在地の裏への場所がえはうまくゆかず、現在地へ建てなおすことになりそうである。松本宮林署と高山氏とさしに接衝を続ける。

・山岳索引の件 (中島)

二十七年から六十年までの総索引がまとまり、明年二月ごろまでに発行したい。九十ページで実費五、六百元になる見当、千部印刷する予定。

・山日記の件 (牧野内)

四十六年度の山日記が出来た。四十五年度会費納入者には無償で配布する。

・文書規定の件 (山崎)

原案を検討、意見を寄せてもらい最終決定したい。

・吉良大使歓迎会の件 (小原)

十二月二十七日にネパールの吉良大使が一時帰国するので、明春早々にでも会で歓迎会を開きたい。この件は神原理事に一任する。

・永原氏死去の件 (山崎)

秋季支部長会議

昭和四十五年秋季支部長会議は年次晩餐会に先立ち十二月十二日午後零時半から本会ルームで開催。三田会長のあいさつのあと、各支部長から現況報告があり、種々懇話した。

▽出席者 三田会長、吉沢、深田副会長、藤井、山崎、丹部、中島各常務理事、今西(関西)、中田(富山)柴田(秋田)熊沢(東海)野口(東九州)伊達(宮城)小林(石川)山本(静岡)後藤(山形)藤島(越後)各支部長、高山評議員、蒲生信濃支部委員。

第十一回登山技術講習会報告
指導研究委員会

期日 昭和四十五年十一月二十二日
二十四日

場所 富士山御座小屋

講師 山崎安治(本部責任者) 広谷光一郎(チーフリーダー)、大森薫雄(ドクター)、松永敏郎(マネージャー) 鹿野勝彦、関田美智子、上田富雄、小沢明夫、高井征一郎、降旗孟、小栗孝康。

受講生 丹羽 治、余野木術、三渡忠臣、斎藤清三郎、星 美恵、小見山 治子、蛇田和男、鎌倉健二、川辺 清北山幹郎、鈴木保男、吉田幹雄、竹内俊樹、高木裕司、岡部幸生、斎藤紀典、吉野正浩、渡辺敦雄、市川秀行、石川善教、佐藤孝夫、五師賢治、坂野晴彦、中川すみ子、染谷まよ子、小島清子、中田晴紀子、松田明美、日高千都子、Michael Ross。

十一月十六日、パーティ編成と打合わせを兼ねて、富士山について(山崎)凍死・凍傷について(大森)、冬山の

準備(松永)の小講話を行なう。

十一月の連休の富士山で行なう講習会は、積雪の状況やバスの運行如何ではなかなか難しい問題がある。予約してあったバス会社から、スバルラインの凍結を理由に解約を申し入れて来た時は説得に苦労したし、前々日の雨で中腹の雪が溶けたという情報にもだいが不安を感じたものである。

二十一日の夜行の予定が、昨年と同様、スバルラインの事故防止のための閉鎖で、二十二日早朝出発に変更。参加者に連絡する。

二十二日朝七時三十分、ルームを出発。中央高速道路を経て河口湖に入る。お庭小屋到着は正午近くになったが、小屋の整理と昼食が済んだ後、早速トレーニングに出発する。積雪は非常に少なく、白草流の斜面は地肌が露出しており、小屋の右上に小一時間登った青沢の凹地、狭い雪の斜面を利用してキックステップやカッピングの練習、ザイル操作の初歩についての講習をする。随所に岩が露出しているので、講師も大分気を使わねばならない。快晴で風もなく、近くは、北岳から聖岳あたりの雪の山頂、遠くは、すっかり雪を鏝って輝く北アルプスが望まれる。四時終了。夕焼けに染まる砂礫の斜面を小屋へはしりくだる。

二十三日、七時。体操で体の固さをほぐした後、全員、昨日の斜面まで登る。復習に加えてビッケル、アイゼンの使い方、滑落停止や耐風姿勢の練習で午前中を費す。風がやや出てきて少々寒いのが、相変らず晴れわたった好天午後にはザイルを使用し、隔時登攀の基礎や制動確保の練習を行なうが、終り頃にはみな仲々上手になる。

実技の講習をやや早目に切り上げて夕食後は、全員が自己紹介に始まる談笑と歌の会になった。若い参加者の趣味の多さと、その中の一つである登山

を自分のそれと思いわせて、講師連中あらためて感心したりあきれたりの夜であった。

二十四日、快晴。技術に応じて、パーティ毎にできるだけ上部に登ってみるということにする。時間の余裕がなかったために、頂上の稜線に出たのは二パーティだけであったが、全員無事に正午少し過ぎに小屋へ帰着した。

昼食後反省会を開き、広谷チーフリーダーを始め、各講師の講評。いずれも、この小講習会で得たものを是非今後にも生かして欲しいと願う。

受講生の感想は、内容が細い点まで行き届いて、まとまった楽しい講習であった。本日の登山技術の何たるかを教えられた、それが如何に大切かを痛感したなど。期間をもっと長くして欲しい、机上講習会に時間をかけて欲しいなどの希望もあった。

三時ちょうど、五合目発。中央高速道路の途中で数人が下車。新宿へ到着したのが七時過ぎ、名残りを惜しみながら解散。とにかく、無事終了。

因みに、受講者の三分の一が会員。他は会員外(会員の紹介が多い)であった。(文責・松永敏郎)

第十三回もみじ会

ことしのもみじ会は、静岡市に編入された白峰山脈の太平洋岸に伸びた最南端にある竜爪山山麓の俵峰の禪宗水月院で十一月十五、六両日行なわれました。禪寺での会合なので参加者を制限したため布団は二十名、支部関係は山小屋に毛布四枚にくるまってる一夜も楽しいう出であった。

麻生さんの製パン話もあり、成瀬、岩永両大先輩の健康と人生勉強の話が続き、世界的話題の日高名譽会員の人の和をまとめるお話。雨の夜中について、足にマメを作りながら元気な眼鏡

顔の、川喜田壯太郎さんと牧野衛さんが全身雨に濡れて寺に到着し、雰囲気を盛りあげる。

珍しく三回目の参加の石原憲治さんも、赤シャツ組の神谷名譽会員の元氣にたじたじでした。山寺でのコンニャクの刺身や手打ちそばのつまみに酒肴の数が重なり、あちこちで放談、雑談のザワメキをまともて、とにかく会の話題を集中するのの中にあつて一生懸命努力していたのは中保さんと杉山正洋君。

誰が雨男なのか、今回も雨、珍しく今回は女性会員が一名も参加せず、翌日、ぬか雨の中を竜爪山と真富士山の縦走に分れる。茂ったクマ笹を体で分けながら、軽るい五時間ほどの山行で竜爪山を経て山麓のわかし湯御殿乳母の湯に土地のバブサン、ジイサンといっしょに入湯。麻生さんも、日高さんも土地のジイサマたちとけこんで見分けがつかない。

元氣な松本、山崎、鈴木、名見耶の諸氏はさらに箱根に向かう。真富士山一行の成瀬、岩永、牧野、佐藤、沼倉中、石原、鶴見、川端、竹端、菅谷、石間、杉山の面々は霧シヨンのけむる真富士山縦走をして夕刻静岡駅に無事下山した。

十三年間続いているこの会もそろそろ反省の期にはいったようである。来年は南アルプスの権島で催したいと考えている。(十一月二十日)

(山本朋三郎)

▽参加者 麻生武治、成瀬岩雄、鈴木英一、岩永信雄、日高信六郎、牧野衛佐藤佳年、鶴見敏彦、水野公男、川端信治、内藤正広、竹端節次、川喜田太郎、山崎金次郎、松本熊次郎、神谷恭、岩永安雄、山本朋三郎、勝見幸雄小野一郎、小野利雄、沼倉寛二郎、中保、菅谷保夫、石間信夫、萩野恭一、石原憲治、名見耶達男、杉山正洋、青

島秀雄。

井上一男所長慰労会

文部省登山研修所井上一男所長は十月一日付で東海大学体育学部主任教授に任命され、後任は西野間幸雄氏がなされた。昭和四十二年研修所開設以来尽力された井上氏の労をねぎらい、あわせて新西野間所長の激励をかねた会を十一月十四日研修所運営委員、専門調査委員の有志により虎ノ門晩翠軒で開催した。榎、三田、深田、村井諸氏をはじめ、日山協を代表して尾関副会長も出席され盛会であった。席上井上前所長に坂本直行氏の剣岳の四号の油絵(目録)を記念に贈呈した。

K2の模型ルームに展示

万博イタリヤ館に展示されていたK2とバルトロ氷河の模型が、諏訪多栄蔵、マライニ、今西寿雄氏らの尽力で会に寄贈された。目下ルームに展示してあります。

代表者変更
六四八五 えぞ山岳会代表今村明信
改 姓
六六二六 小川幸恵 旧姓西沢
物故者
三六八五 小畑貞吉 昭和四三・二・
一〇逝去
七七九 中村慶蔵 昭和四五・四・一
逝去
四四一七 広田憲治 昭和四五・七・
一五逝去
一七〇三 桐内武千雄 昭和四五・八
・二五逝去
一六四二 泉 靖一 昭和四五・一一
・一五逝去
六二五 田辺多聞 昭和四五・一一・
二九逝去
二二二二 上田哲農 昭和四五・一一
・三〇逝去
三〇逝去

ルーム日誌(45年11月)

- 4日(水) 理事評議員会
- 10日(火) アンドレ・コンタミーヌ氏 歓迎会
- 11日(水) 図書委員会
- 16日(月) 海外連絡委員会
上講習会
- 18日(水) 評議員会
- 20日(金) 常務理事会
- 22日(日) ヒンズー・クシユ会議
- 25日(水) 稲門山岳会
- 27日(金) 学生部例会
- 十一月中来室者 二九二名

藤木九三名譽会員死去

本会名誉会員藤木九三氏は昭和四十五年十二月十一日、じん不全のため西

宮市明和病院で死去した。八十三歳。葬儀は十二月十三日午後一時から西宮市正念寺で行なわれ、本会から花輪をそなえ哀悼の意を表した。

マラソン大会報告 十一月二十九日学生部恒例のマラソン大会を皇居で行ないました。当日、天皇陛下の外出というハプニングがあり、スタートが二時間程遅れましたが、幸い天候にも恵まれ無事終了致しました。成績は次の通りです。

- 団体の部①早大②駒大③千葉工大
- 個人の部①大谷君(早大)②東君(理大)③高橋君(青学大)
- OBの部①望月氏(駒大OB)②神崎氏(日大OB)(学生部・藤沼記)

新西蘭土だより

大野 俊 夫

ただいまニュージーランドに来ております。巡航見本市船さくら丸の入港その他の接衝で在外公館との連絡にわたるためということ……寸暇を利用してマウント・クックを見るためにホテル・ハミテージにやってきました藤島さんの会報に寄せられた「新西蘭土だより」に刺激されてウエリントンからこちらにきました。今朝は五時に起きて朝日に輝やくバラ色のクックを眺め満喫しました。南半球のここではないが晩春、夏を迎える前の山の姿です。

オークランドの船のパーティでヒラリー卿にお目にかかりました。J.A.C.の方々、日本の皆様によるしくとのことでした。夕方ウエリントンに帰って明日のさくら丸入港に当ります。十一月に帰国の予定です。

(十月二十五日織内あて)

あとがき 明けてお目出度うございます。本年もよろしく。さて四十五年度の最大の集会である年次晩餐

ガストンの山岳書店
店主・L.C.ボーム(英国山岳会員)

登山、極地に関する各国の新刊、旧刊、絶版ものの取次ぎ販売。各国山岳会年報、月報、登山案内書、特殊地図、版画なども取扱っております。型録その他のご照会、お申込みをお待ちしております。

宛名 "GASTON'S ALPINE BOOKS"
134 Kenton Road, Harrow Middlesex,
HA3. 8AL, England
(なお、JAC, AC, AAC, ACCの会員、Mr. Ichiro Yoshizawa は、私の親しい友人です。)

会も無事にすみました。相変わらず無断欠席者が多く、昨年は二十五名もあり、会計係りをあわてさせました。無断欠席された方は当日の会費を御送金いただければ幸いです。山日記七一年度版も出来上りました。ことしは十二月までに七〇年度会費納入の方に限り無料で配布することにしました。新年早々ですが七〇年度会費未納の方は大至急納入して下さい。(山崎)

昭和四十六年一月十日発行
東京都千代田区神田錦町
三二二三 向井ビル
発行所 社団法人 日本山岳会
編集代表 山崎 安治

印刷所 東京都港区赤坂一丁目三番六号
株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆
製本代 (251号~300号) 金 700円也
送 料 別 受 け 金 120円也
ナカバヤシ株式会社

東京店・文京区水道2~15、電話(943)0311(代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352)3491(代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731)7331(代表)
工場:大阪工場(堺市)、東京工場(戸町)

▶背文字その他については往復はがきで日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい

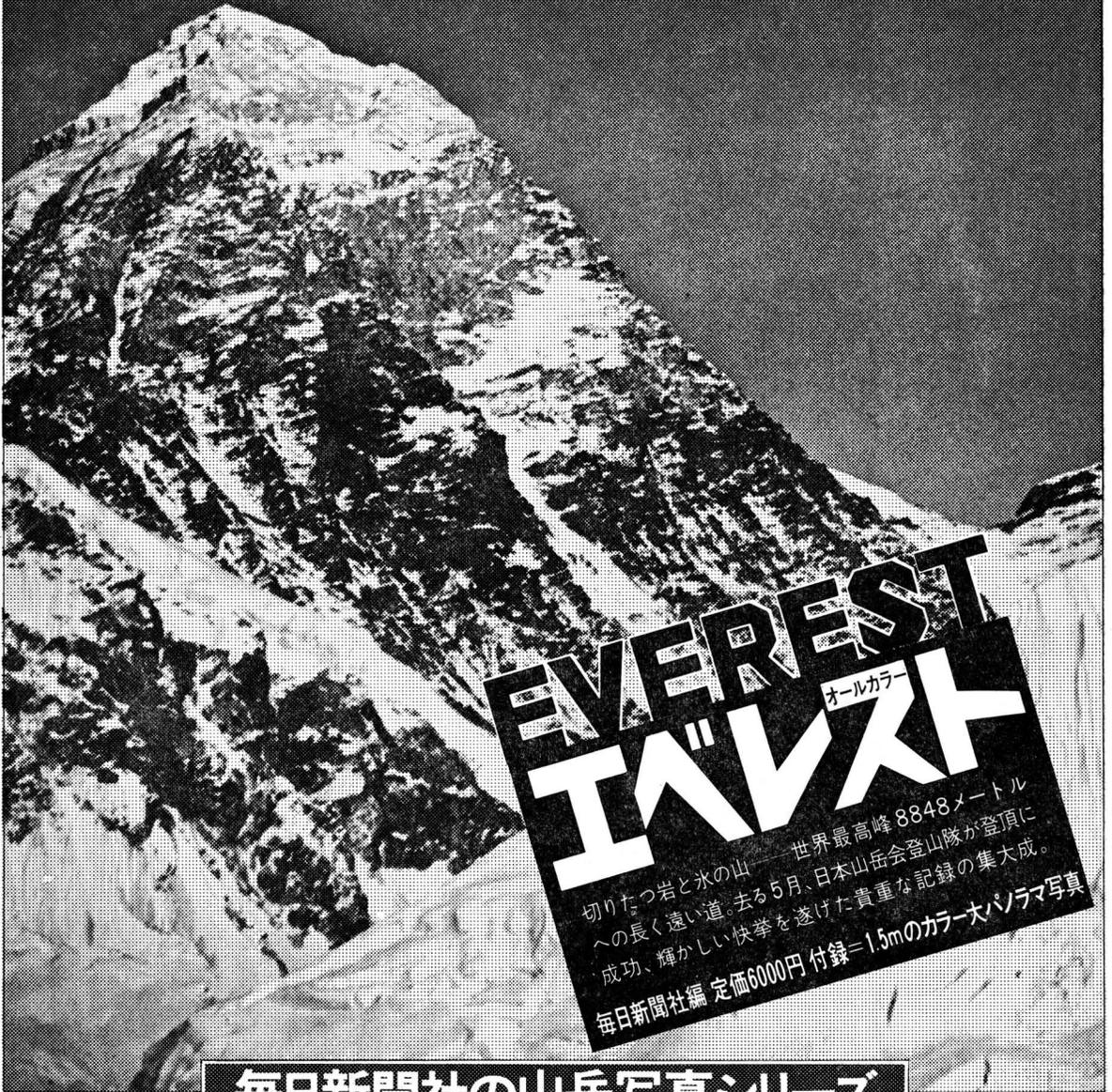
山岳保険に入りましたよ!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部(専門取扱営業所)
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話(352)1556・1557

白い魔の巨峰にいどんだ栄光への足跡



EVEREST
オールカラー
イベント

切りたつ岩と氷の山——世界最高峰 8848メートル
 への長く遠い道。去る5月、日本山岳会登山隊が登頂に
 成功、輝かしい快挙を遂げた貴重な記録の集大成。
 毎日新聞社編 定価6000円 付録=1.5mのカラー大パノラマ写真

毎日新聞社の山岳写真シリーズ

下記4巻のセットもあります。セット価3440円 各巻=A4変型カラー・白黒160ページ 860円

アルプス

「山岳の楽園」ヨーロッパ・アルプス。
 他に南北アメリカ、アフリカ、南極、
 北極の山々など、雄大な連峰の全容

ヒマラヤ

「白き神々の座」とうたわれるヒマ
 ラヤの全容とニュージーランド、
 ソ連、東南アジアの山岳写真集

富士山

雪、夏草、霞、紅葉……四季おりおり
 のゆたかな表情で見る人を魅了する
 「霊峰」富士山のすべて

日本の火山



狭い国土にひしめく火のエネルギー
 火山は爆発ときがもつとも美しい。
 日本の火山の噴火・爆発写真集

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

森林・草原・氷河

加藤泰安著

〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

〈B5判206頁〉定価2,800円

40年のキャリアをもつ編集と内容。
赤いカバーでおなじみの……

山日記

1971年版

日本山岳会編

〈A6判400頁〉定価750円

山岳

日本山岳会編

〈A5判〉

64年 2,000円

63年 2,200円

62年 2,000円

61年 1,800円

60年 1,500円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編

〈A12取変型判170頁〉定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

〈A5判350頁〉定価900円

キンヤンキッシュ1965

東京大学カラコルム遠征隊編

〈B5変型判220頁〉定価3,000円

南極新聞1956～7年

南極研究会編

〈B5判横トジ〉定価600円

登山・スキー用具専門店

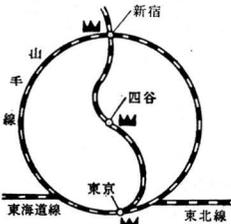
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買いやすい
山の店

●北へ来たたら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 65664

日本信販加盟店



山友社 たかはし

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



かたろぐシンテイ
でん 281-8456
中央区八重洲4-1

秀山荘

登山とスキー具
プライス
リスト進呈

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
神戸店・生田区北長狭通 3-8-19 (39) 4 1 2 6
神戸店・生田区三ノ宮町1-32-1 (33) 5 2 5 1
福岡店・須崎町 1 - 4 (28) 3 4 4 0

